

„Helmbrecht“ の作者の身分について

(その一)

寺 田 龍 男

本 稿 目 次

0. 序
1. 研究史概観
 - 1.1. F. Keinz の „Pater Gärtner“ 説
 - 1.2. C. Schröder の „Bruder Wernher“ 説
 - 1.3. K. Schiffmann の Krems の ‚Gärtner‘ 家出身者説
 - 1.4. K. Stechele の „Wernher von Burghausen“ 父子のどちらか説
 - 1.5. F. Panzer らの ‚Fahrender‘ 説
 - 1.6. Ch. E. Gough の ‚Franziskaner‘ 説
 - 1.7. B. F. Steinbruckner らの騎士身分説

0 . 序

13世紀の中盤から後半にかけてのある時点で成立したとされる¹⁾ „Helmbrecht“ の作者は、一般には写本 A (有名ないわゆる „Ambraser Heldenbuch“) の最終行に出る名前から、Wernher der Gartenaere という人物だったろうと推定されている。²⁾ 実際、今日手に入る Ausgabe もすべてそのおもて表紙に Wernher der Gartenaere という名を挙げており、彼がこの作品をなしたことはあたかも真実であるかのような印象を与える。しかしこれはそう簡単に割り切れる問題ではない。この物語を今日にまで伝えるもうひとつの写本 B には、周

* 本稿は昭和60年度文部省在外奨学金給費学生としてドイツ連邦共和国ミュンヘン大学に学んだ際、Herbert Kolb 教授のゼミナール „Die Erzählung von Helmbrecht“ (1985/86年度冬学期) で同教授の指導を受けた研究の成果の一部をまとめたものである。Kolb 教授はもとより、資料収集等でお世話になった浜崎長寿、吉田敏彦、大塚譲、副島博彦、橋本聡、浜田敏道の各氏、そしてとりわけ Andrea-Maria Falge にはあつく御礼を申し上げたい。

1) たとえば Brackert et al. 1972, S. 132f.

2) たとえば Ruh 1974, S. XII および XVII.

知のように作者（たりうる者）の名前が記されていないのである。

たしかに、1902年に出た Panzer の精密な研究以来、³⁾ 写本 A のテキストの方が B のそれよりもいわゆる Original に近いという認識が今日まで支配的であり、その意味では両写本で大幅に異なるテキスト末尾の記述に対する信頼の置き方に影響が出るのも一理あることではあろう。けれどもこの箇所では、テキストの他の部分のように物語の内的世界が描写されているのではなく、——写本 A に関していえば——作者が自らを紹介するという、いわば次元の異なった世界が表出されているのである。一貫した筋立てをもつであろう内的世界が具現されたそれぞれの物語テキストを比較する基準を、はたしてこの部分にそのままあてはめてよいだろうか。なるほど写本 A と B のそれぞれの Archetypus は、直接であれ間接であれ、同じものであったろうと今日推測されている。⁴⁾ また写本 A の筆者である Hans Ried はその原拠にたいへん忠実であったと認められているから、⁵⁾ 筋の進行する部分については写本 A のテキストに従うのがよいだろう。しかし「思慮深く」書写したとされる B の筆者が、⁶⁾ 自らの原拠にあった(?) この名前を落としたことにはそれなりの理由があったかもしれない。そういう姿勢をもつ人物だったからこそ（写本 A の）1923行以降にあたる部分を（不純とみなして?) 全面的に変えたかもしれないのである。実際 Blosen は、Wernher をこの作品の詩人とみなすことにはいくらかの留保をつけるべきだと考えている。彼によれば Wernher は、写本が書かれては伝えられるという過程が繰り返される途中で「入りこんだ」人物だったかもしれないからである。⁷⁾

そこで本稿および次稿では、„Helmbrecht“ の作者が Wernher der Gartenaere なる人物であったかどうかはひとまずおいて、この作者がどのような社会身分に属していたかというより本質的な問題を考えることにする。こ

3) Panzer 1902, S. 88-112.

4) Brackert et al. a. a. O., S. 123.

5) Panzer a. a. O., S. 101.

6) ibd., S. 100.

7) Blosen 1974, S. 302.

の点は実は研究史のスタートとほぼ同時にとりあげられ、今日既に100年以上も論ぜられていくつかの有力な仮説があるものの、いまだに定説はないといわざるを得ない状態なのである。だから今後よほど決定的な資料でも出ない限り、たしかに Brackert らが述べたように、いくつかあるうちのどのテーゼに最も大きな説得力があるかという形でしか議論は進行しないであろう。⁸⁾ しかし最近 Kolb が作者について新しい見解 (法律関係者説) を出したため、⁹⁾ 今後また議論が活発になることが予想される。そこでまず本稿で、これまでに出された様々なテーゼのいくつかを整理して紹介し、次稿での本論展開の土台をなすよう批判・検討を加えてゆくことにする。それらにより、先の名前の問題にも資することがあろう。¹⁰⁾

1. 研究史概観

1.1. Friedrich Keinz の „Pater Gärtner“ 説

これまでに出された諸々の見解のうちで最初の見べきものは、1865年に Keinz がその校訂版の解説で示したものであろう。¹¹⁾ これによると、1125年に Salzburg の大司教 Konrad 一世が Bayern の Heinrich der Schwarze 公の協力により Ranshofen (Inn 川流域で Salzach 川との分岐点近く) にアウグスチノ派の修道院を建立した。(これは1811年10月26日に廃止されるまで続いた。) さらにこの土地の古老の記憶やその親たちの語ったところによると、古くからこの修道院では pater たち——即ち学識のあった人々——のうちの一人が庭師 (Klostergärtner) として働き続けていた。彼らは広い庭の管理だけでなく、毎年この修道院の全領域をまわって農民たちに果樹栽培等を教える役割も担い、時には笑話を語ることもさえあったという。そこで

8) Brackert et al. a. a. O., S. 130.

9) 筆者が参加したゼミナールで彼自身が述べたもの。今のところまだ文書の形では発表されていないようである。

10) なお, „der Gartenaere“ という添え名の意味についてもしばしば論ぜられているが, ここでは次章で何度かふれる以外は特に立ち入らない。この添え名の「解釈」については Piper (1889, S. 399f.) 等に詳しい解説がある。

11) Keinz 1865, S. 14f.

Keinz は、彼が „Helmbrecht“ の作者と断ずる Wernher の Beiname である „der Gartenaere“ に注目し、この人物が作品の冒頭で自ら体験した事を語ると述べてもいるところから、¹²⁾ Wernher はこれらの Klostergärtner のうちの一人だったと考えたのである。

さらに Keinz は 1887年に出したその校訂第二版でいくつかの新たな論拠を挙げた。¹³⁾それによると、この作品がまとめられたのは主に農民教化と後世のためであり、その効果的主段として会話体が用いられた。そしてこうした手法は、Fahrender (遍歴芸人) でなく民衆教化につとめる Geistlicher (聖職者) にふさわしい。だから以下の例も民衆に親しい調子で語りかける聖職者の口から出たと考えてよいと Keinz はいう。

ich bin vil gar erlâzen/ sô guoter handelunge,/ als dâ
hêt der junge. (v. 840-842.)

(私なぞ、この若者がこうしてもてなされたようないい目を見ることはまったくありません。)¹⁴⁾

swie vil ich var enwadele,/ sô bin ich an deheiner stete,/
dâ man mir tuo als man im tete. (v. 848-850.)

(私がどんなにあちこち廻っても、このように結構なもてなしにあずかれそうな所はありますまい。)

(wær ein herre in hôher aht,/ mit der selben rihte/
wold ich haben phlihte): (v. 864-866.)

(もし私が高貴のお方であったとしても、このような料理ならば御馳走にあずかりたいと思ったことでしょう)

12) hie wil ich sagen waz mir geschach /daz ich mit mînen ougen sach. (v. 7f.)
以下引用例はすべて Ruh の校訂版 (1974) による。

13) Keinz 1887, S. 9-13.

14) 以下訳文は浜崎長寿氏の翻訳 (1970) を引用させていただいた。なお文意をわかりやすくするため、表現をわざと生硬に改めたところがある。

ich wil des mit wârheit jehen,/ daz ich bî dem selben
knaben/ den wîben hêt unhôhe erhaben. (v. 208-210.)

(ほんとうのところ、この私なぞ、その若者と並んだなら、女たちからてんで見向きもされなかったことでしょう。)

die nâte ein nunne gemeit./ diu was durch ir hovescheit/ ûz
ir zelle entrunnen./ ez geschach der selben nunnen/ als vil
maneger noch geschicht: (v. 109-113.)

(その〔帽子の〕刺繍をしたのは浮かれものの尼さんでした。華やかな暮らしへの望みがたちきれず、彼女は僧房をとび出したのでした。今でもよくある話ですが、その尼さんも御多聞にもれなかったわけです。)

特に最後の例について Keinz は、Ranshofen の修道院が当初男女ともに収容するいわゆる Doppelkloster だったことから、¹⁵⁾ 風紀が乱れた可能性などを示唆しつつも、根本的にはやはり社会道德の低下を厳しく指弾する聖職者が農民らに対する教化のためにこうした文をあえて口にしたのだという見解を貫いているのである。

さて以上が Keinz 説の要旨であるが、これには疑問な点が多い。彼の挙げた „der Gartenaere“ という名称の共通点は別にして、農民たちの間をまわって彼らの生活に通じていたといくら強調しても、だからといって彼らを導くためにこの作品をなした、つまり聴衆に農民層を想定したことにはいささか無理がある。こうした類の仮定を「まったくの時代錯誤」とみなす Ruh の見解は別にしても、¹⁶⁾ 写本に書き残されるような作品はまず第一に宮廷人をその Publikum としたという前提から出発すべきであろう。当時はまだこのような

15) 1296年になって修道女の数が6人に制限され、1314年には修道女などの入所が禁じられた。(Keinz 1887, S. 12)

16) Ruh a. a. O., S. XIX.

文芸活動が貴族や高位聖職者の社会に属していたからである。¹⁷⁾たしかに文芸活動それ自体は、宮廷だけでなくたとえば「路傍」でも行われており、¹⁸⁾従って農民等の下層階級が聞き手となったことは十分あり得るのだが、異なった聴衆を相手にまったく同じ文芸活動が行われていたとは考えにくい。さらに「土地の古老たちの記憶」というのもたしかに重要な要素ではあるが、Keinzの時代からでさえ約600年も遡ることについて、一体どれだけの真憑性があるだろうか。文献で証明するのは不可能であろう。また先の「自ら体験したことを語る」という表現（いわゆる Wahrheitsbetueerung）は、今日では真実というよりむしろ宮廷文学というジャンルに固有の一種の Formel と解されている。¹⁹⁾

ところで Panzer はその校訂版の解説で、作者の身分に関して示唆を与える諸々の表現は「聖職者」という可能性をむしろ否定するものだとみなし、次のような例を挙げる。²⁰⁾

ich gibe ouch keinem pfaffen/ niht wan sîn bârez reht.

(v. 780-781.)

(たとえお坊さまにでも、余計なほどこしはしてさしあげられない。)

これは農民の理想像として描かれている Helmbrecht (父) の口から出ているだけに、作者を聖職者とは考えずらいと Panzer は述べる。また先に挙げた112行以下、208行以下に続いて、

gesagt ich nie iht wâres,/ doch sult ir mir gelouben/

daz mære von der houben,/ wie kleine man si zarte.

17) Wehrli 1984, S. 69f. および Bumke 1986, S. 638f.

18) Bumke a. a. O., S. 691.

19) たとえば浜崎 a. a. O., S. 158 および Brackert et al a. a. O., S. 139.

20) Panzer 1941, S. XI f.

(v. 1892-1895.)

(これまで私が一度も本当の事を言わなかったとしても、その帽子が如何に小さく引きちぎられたか、そのことだけはどうか皆さん信じていただきたいと思います。)

という作者の言明、そして839行以下と848行以下にいたっては、作者の素姓としてもはや聖職者は考えられず、むしろ 遍歴芸人 (Fahrender) だったろうと Panzer は考えるのである。ではまったく同じ文について、Keinz と Panzer の見解がこのように異なるのはなぜだろうか。ひとつには、Panzer が純粹にテキストに書かれたことだけから判断しようとしているのに対し、Keinz の方には Pater Gärtner と結びつけようとする明らかな先入観がまずあり、これが個々の文の解釈にまで影響を及ぼしているといえよう。

今日最も多くの支持を集めているこの Fahrender 説の当否については後に論じることにするが、実際、これまで見てきた Keinz の考え方には、現実には文献で証明できないものを自らの想像力で補おうとしたり、あるいは lokalpatriotisch な声に動かされたふしがあり、実証的とはとてもみなし難いといわざるを得ないのである。そのためか、当初はこの „Pater Gärtner“ 説も多くの支持を得たようであるが、その後は研究史上の (過去に消え去った) 一仮説として短く紹介されることはあっても、積極的に支持するような論考はほとんど出ていない。²¹⁾

1.2. Carl Schröder の „Bruder Wernher“ 説

Keinz と同じ1865年、Schröder はその論文の中で Keinz 説を否定し、„Helmbrecht“ の作者はオーストリアの格言詩人 Bruder Wernher と同一人物であろうと述べた。²²⁾

21) なお R. Schröder が Keinz 説に近い態度をとっている。(R. Schröder 1870, S. 302).

22) C. Schröder 1865, S. 455-464.

彼はまず „Helmbrecht“ が叙事詩としては唯ひとつ農村を舞台にした作品であることに注目した。さらにこれが好んで衣服の描写を行っていること、²³⁾ 本文217行以下で特に名を挙げていることから、²⁴⁾ この作品の作者は、同じく農民を主題の中にとり入れた作品をつくったとされる叙情詩人 Neidhart von Reuental と何らかのかかわりがあったろうと推定している。そして「農村」をテーマとした文芸が最も厚遇されたのが Wien であり、Neidhart がそこで重要な役割を果していること、そして作品を貫く根本思想に共通点があることから „Helmbrecht“ の作者を、やはり Wien で活躍したことのある Bruder Wernher だったと考えているのである。またその際 „Wernher“ という名が有力な根拠になるとしてもいる。

また身分については、Bruder という表現はあってもこれは聖職者を意味する訳ではなく、いわゆる Manesse 写本の肖像の紋章から推して貴族の出であろうと Schröder は述べる。ただ „Helmbrecht“ の本文848行以下（作者が主人公の受けた厚遇を羨むくんだり）と、衣裳や食事について述べる部分の調子に注目し、貧しい放浪生活を送る境遇だったと推定している。²⁵⁾

しかしこの Schröder 説も後に Panzer の強力な反論を浴びて今日に至っている。²⁶⁾ Panzer は三つの点で Schröder に反駁した。

第一に „Wernher“ という共通点は単なる共通点であってそれ以上の何物でもない。第二に両者の思想に類以点はあるが、これらは二人だけの共通点というよりはむしろ彼らの時代が生んだものであって、彼らだけに限定することはできないとした。さらにこの点を補い、Bruder Wernher は真面目で常に説教をして叱るような口調があるのに対し、Wernher der Gartenaereの方は

23) たとえば v. 14-20, 26-103, 178-216, 271-277等多数。なお Neidhart von Reuental に関しては詩節85, 38から86, 30を参照されたい。

24) 「ニートハルト殿、このひとには天賦の才がありましたが、これがもし生きておられたならば、私がこんなお話をするよりずっとたくみに歌って聞かせられたことでしょう。」 „Helmbrecht“ v. 217-220. なお原文省略。

25) なお Bumke は、彼を聖職者ではあるまいとしながらも、貴族の可能性についてはなんらふれていない。(Bumke 1976, S. 19)

26) Panzer a. a. O., S. Xf.

冷めたところがあるほか笑って見下したり嘲って満足するような姿勢がみえる、としている。このような内的な乖離点を指摘したあと、Panzer は Schröder 説を決定的に論破したとされるきわめて実証的な論拠を最後に挙げた。

Panzer は Bruder Wernher の作品と „Helmbrecht“ に現われた脚韻の特徴を詳細に調べ、両者の用いた方言と韻のふみ方に数多くの相違点があることを明らかにした。たとえば

<u>Bruder Wernher</u>	<u>„Helmbrecht“</u>
{ az baz	{ Küefrâz (v. 1547f.) âz
{ gesaget klaget	{ betaget (v. 1047f.) gesaget
{ geklaget gedaget	{ gekleit (v. 1021f.) breit
	{ edelkeit (v. 507 f.) geseit

という例が示すように、両者で母音の質が異なるケースがある。また Bruder Wernher では sagen, klagen 等の動詞で -aget 形ばかりが出るのに対し、„Helmbrecht“ では更に -eit 形もある。こうした、両者の母音のとり方の違いや、同じ単語でも語形に双方共かたよりがあるような例は他にも数多く報告されている。²⁷⁾ さらに最近の研究成果を援用すれば、この Schröder 説を否定するためにもうひとつ重要な論拠を挙げられる。まず Schröder は Helmbrecht (父) の口を通して特に次のような思想がくみとれる、としている。

1. 自らの身分を越えることで神の定めた秩序に逆らうのはよくない。

27). ただし Panzer はオリジナルから (おそらく複数の) 写本をへて校訂版に至るまでのプロセスになんらふれていない。従ってここで挙げられた用例が——Bruder Wernherも含めて——オリジナルの語形を忠実に再現したものかどうかはおおいに疑問であるとしなければならない。(Vgl. Brackert et al. a. a. O., S. 122f.).

2. 農民は宮廷人の一員たるにはふさわしくない。
3. しかし徳が備わらなければ金持ちや貴族も無に等しい。
4. むしろ徳こそが人間の価値をはかる唯一の基準。

そして彼は、これらが Bruder Wernher の根本思想に一致するとみる。²⁸⁾ しかしこれらのうち3. は、その好例として „Helmbrecht“ の487-508行及び913-1039行が最近よく引用されている宮廷批判及び社会批判 (Hof- und Gesellschaftskritik) の思想にはほかならない。²⁹⁾ Schröder は Bruder Wernher の作品についても „Helmbrecht“ の「批判」によく似た箇所を指摘しており、これ自体はおおいに注目すべきであるが、これらの作品がつくられた当時は聖職者文学から宮廷叙事詩や格言詩、さらには英雄叙事詩にまで「批判」の文句が入りうる時代だったのである。特に Bumke は、過ぎ去った時代を賛美することが現実社会を批判する効果的な手段となったとし、例として Hartmann von Aue の „Iwein“ (v. 48-52), Walther von der Vogelweide (23. 32f.) を挙げているが、³⁰⁾ „Dietrichs Flucht“ (v. 54-56) もこれに該当しよう。この点は先の Panzer の批判にも重なるのであるが、単なる類似点だけで二人の人物を同一視するのはやはりいささか性急すぎるといえよう。

このような理由により、Schröder 説も先の Keinz 説と同様今日ではもはや受け入れられていない。³¹⁾

1.3. Konrad Schiffmann の Krems の ‚Gärtner‘ 家出身者説

Schiffmann は、この作品がつくられたのが今日の (低オーストリアの) Kronland と断じたあと、Donau 川流域の Krems に Gartenaere とい

28) C. Schröder a. a. O., S. 461f.

29) たとえば Bumke 1986, S. 26f. および583-594.

30) Bumke a. a. O., S. 26 ff.

31) なお Piper (a. a. O., S. 401) がこの Schröder 説に近い立場をとっている。Ruh a. a. O., S. XVIIIf. および Brackert et al. a. a. O., S. 130 を参照されたい。

う名の人物の記録があることから、これと „Helmbrecht“ の写本 A の末尾の Gartenaere が結びつくという説を1917年に発表した。³²⁾

彼によると、ある古文書に出る Krems の Eberhard der Gartner という人物が、1293年12月15日付けで上オーストリアの Baumgarten 司教区に自分の家とぶどう畑を遺贈した。またこの家系には、1459年に Krems の人々が皇帝に従うようになった時頭目だった Gärtner という人物も属していたと推定している。³³⁾ そのため Wernher der Gartenaere も Krems の Gartenaere 家に属していた可能性が高いが、その名が記録文書に載っていないのは、彼が Fahrender となって出ていったからだろうと Schiffmann は結論づけているのである。

しかしこの仮説も、その後は1940年に Schiffmann 自身が別の論稿で自らの見解に再びふれた以外は特にこれを支持する意見が出されていない。³⁴⁾ 逆に Steinbruckner や Brackert らに説得力のなさを指摘されており、³⁵⁾ 特に有力な証拠が発見されない限り今後も取り上げられることはないと思われる。

1.4. Karl Stechele の „Wernher von Burghausen“ 父子のどちらか説

Stechele は、先の Keinz 説の項で挙げた Ranshofen の修道院に残っている記録文書に数回出る Wernher von Burghausen という人物を „Helmbrecht“ の作者とみなす見解を1922年に発表した。³⁶⁾ これによるとまず1210年にこの人物がある件の証人として古文書に登場する。続いて1212年の3月にはこの人物の息子（父親と同名）が Ludwig 公とともに Frankfurt

32) Schiffmann 1917, S. 13f.

33) さらに Schiffmann は „Helmbrecht“ 本文中に現われる人物と同じ名をもつ者も記録に残るとしているが (ibid., S. 14), ここでは立ち入らない。

34) Schiffmann 1940, S. 43.

35) Steinbruckner 1968, S. 378f., Brackert et al. a. a. O., S. 130および Ruh a. a. O., S. XVIII.

36) Stechele 1922, S. 348f.

にいたことがわかっている。さらに1215年の記録には父子がともに現われ、この名前は1220年頃のものにもまた記されているという。つまり Stechele にとっては、この父子の名前とここで問題とする作品の最末行に出る名前の共通点である、'Wernher' が、まず第一の根拠となっているのである。

第二の根拠の手がかりとして、Stechele はさらに次の文を引く。

lieber sun mîn, nu trinc/ den aller besten ursprinc/ der
ûz erden ie geflôz./ ich weiz niht brunnen sîn genôz,/
wan ze Wanchûsen der:/ den treit et uns nû niemen her.'

(v. 893-898)

(まあお前、大地からわいて出た中ではとびきり一番の、この泉の水でも飲んでおいてくれ。ヴァンクフーセンの泉よりほかに、これと比べられるような泉をわしは知らないが、あれを今ここへ誰かがもって来もすまいしな)

Stechele は、この Helmbrechtshof (?) の近くの泉とは Reuterbrünnlein のことだと断じたうえで、この土地の出身でない者がどうして上の二つの泉を知りうるか、という疑問を呈している。なぜならこの Burghausen 近郊の Weilhart の森の向こう（ここに Helmbrechtshöfe があると Stechele はいう）にはまともな道が通じていないからである。さらにもし作者が fahrender Sânger だったならこんな人里離れた森の奥に足を踏み入れることはなかったろうし、またそうした境遇ならば Lyriker だった筈だとして、この作者はやはり地元出身で騎士身分だったと Stechele は述べているのである。

彼の大胆な推測はさらに続き、この „Helmbrecht“ の文体の辛辣さは、作者が厳格な Heinrich 十三世とその敬虔な妻 Elisabeth の宮廷に仕えていたからであり、der Gartenaere という綽名も、騎士生活を引退した後に入った Ranshofen の修道院で熱心に庭の手入れをしたことにより、ひょっとすると院長らが冗談まじりにつけたものを本人も喜んで作品に書きこんだのだろうと

している。(他にもいくつかの細かい点を Stechele は挙げているがここでは省略する)

果して彼の仮説は真でありうるか。まず彼の挙げた古記録であるが、,Wernher' という名前以外に、二人の騎士 (のどちらか) とこの作品を積極的に結びつけるものがあるかと問われれば否と答える以外あるまい。Wernher von Burghausen 父子がこれらの古文書に登場する1210—20年というデータ自体は、この作品の成立年代に関する最近の研究と照らし合わせてみても、必ずしもまったく不自然というものではない。³⁷⁾しかしそれ以外の Stechele の論拠は、彼自身が Ranshofen 周辺の土地事情にいくら精通していると主張しても、³⁸⁾いわば独断のかたまりであり、Spekulation としてはおもしろくても文献で証明することはほとんど期待できないような点ばかりが挙げられている。そのため今日では Steinbruckner がやや好意的に紹介している程度で、³⁹⁾他はもうまったく無視しているに等しい。

1.5. Friedrich Panzer らの ,Fahrender' 説

今までのところ最も有力とみなされている「作者 (=Wernher der Gartenaere) =Fahrender」説は、まず Panzer がその Ausgabe で詳しく展開したとあってよいであろう。⁴⁰⁾

既に見てきたように Panzer は Schröder と Keinz の、特定の人物と結びつけようとする仮説をいずれも根拠薄弱として否定した。⁴¹⁾だが

37) たとえば Brackert et al. (a. a. O., S. 132f.) はその成立を1237-90年代の間とみている。

38) Stechele a. a. O., S. 349.

39) Steinbruckner a. a. O., S. 378.

40) 初版は1902年刊行であるが、ここでは1941年の第5版をもとに論を進める。(Panzer 1941, S. X-XV) なおこの説のアプローチのし方が本章第3項で扱った Schiffmann のテーゼ (これも一応 Fahrender としている) のそれとまったく異なるため、項目を分けたのである。

41) Panzer は R. M. Meyer がたてた「聖職者説」(Meyer 1908, S. 428f.) も否定的に紹介している。(Panzer a. a. O., S. XII) 実際 Meyer 説は根拠がきわめてあいまいなので、詳細はここでも取り上げない。

„Helmbrecht“ の最終行に現われる固有名は、他に記録がないために特定の個人と同一視するのが今のところ不可能である。そこで Panzer はこのような試みをせずに、「作者がどんな身分に生まれついたか」という疑問を自らに課し、遍歴芸人 (Fahrender) だとする自説をそれに答える形で詳述しているのである。まず彼の論拠を挙げよう。(なお先に扱った先行諸説に対する批判の形で Panzer の主張を既にいくつか紹介してあるが、重要なものに限って再びここに記す。)

1. 本文848行以下の記述 (「私がどんなにあちこち廻っても、このように結構なもてなしにあずかれそうな所はありますまい」) は [聖職者よりもむしろ] 遍歴芸人の口にふさわしい。
2. 作者は自らを職業詩人とみなしていた。(これは作品の冒頭より明らか。)
3. 本文864行目の「もし私が高貴のお方であったとしても」というくぐり は作者自身の語りであるから、ここで彼が高貴な身分ではなかったことがわかる。
4. ein herre næm der spise war,/ swenne er gejeides phlæge/
und ûf einer warte læge. (v. 884-886)
(偉いお方でも、狩に出かけて獲物を待ち伏せしているような時に、
こういう食事でありついたら、悪い気はいたしますまい。)

こうした発言もむしろ身分の高くない者にふさわしい。(作者は農民階級の出身かもしれない。)

5. ただし宮廷人の視点に添い、また宮廷人のためにこの作品がつけられたのであるから、騎士身分だった可能性はある。(たとえば913行以下で主人公の父親が宮廷行事の素晴らしさを称えている点はその好例である。)
6. しかしその父親が本文969行以下では次のように述べている。
die valschen und die lösen/ die diu reht verbösen/ mit ir
listen kunden,/ die herren in dô niht gunden/ dâ ze hove
der spise./ der ist nû der wîse,/ der lösen unde liegen

kan,/ der ist ze hove ein werder man/ und hât guot und
 ère/ leider michels mêre/ danne ein man der rehte lebet/
 und nâch gotes hulden strebet. (v. 969-980)

(正しいものを悪くみで台なしにするような、よこしまな人間やろくでなしめら、そんな連中を殿様たちはお館に召しおいたりはされなかったもんだ。今では人をたぶらかしたり、だましたりするのがえらいということになっていて、そんな奴がお館で大きい顔をし、困ったことだが、まっとうに暮らして神様のお恵みにあずかろうと努める人よりも、ずっと多くの富と威信を得ている。)

ここは父親による宮廷批判の形をとってはいるものの、実は遍歴芸人たちがかつてのように喝采を受けかつパンにもあずかる機会が、宮廷人のたちの悪い取り巻き連中によって奪われているのを嘆いた箇所である。実際作品を貫く作者の精神的な姿勢もこれに対応している。さらに作者の知っていた(と思われる)先行諸作品(または伝承)や文芸上の技法等との関連と、学識をもっていた跡がなんらうかがえないという点により、作者はやはり貴族等の宮廷でその芸を披露していた遍歴の職業詩人だったと考えられる。

Panzer によるこれらの根拠は、有力なものとして基本的にそのまま今日まで受け継がれ、多くの研究者が繰り返して論じている。そこでさらにその後の議論の中で出た新しい、もしくは特に注目すべき点を以下に付け加える形で紹介する。

1954/55年に Siegfried Gutenbrunner が „Helmrecht“ の構成に関する見解を述べ、いわゆる四行句 (Vierzeiler) が作品の末尾近くに多用されていることから、やはり作者は Fahrender だったろうとした。⁴²⁾ この四行句というのは4行でひとつの単位をなし、ふつうは意味のうえでもひとつのまとまりをもつ詩句である。従って脚韻も(ここでは) aabb と揃っていなければならない。また一般にはこの4行だけでひとつの独立した詩をなすとされ、⁴³⁾

42) Gutenbrunner 1954/55, S. 65f.

43) von Wilpert 1979, S. 885.

Gutenbrunner も歴史を扱う民衆詩 (historisches Volkslied) の前段階だったろうと推測していることから、口頭伝承詩 (mündliche Dichtung/oral poetry) ——四行句はその重要な Formel/formula だった——の主な担い手でもあった遍歴芸人を彼がここで問題にした、あるいは少なくともそれを念頭に置いたと解してよかろう。ちなみに彼はその四行句の例として、1951—66行、1703—06行、1823—26行、1919—22行⁴⁴⁾を挙げて、„Helmbrecht“ はこうした文体をもつある原典によったのではなく、作者がいわば伝統を守ったのだらうと考えている。

これは興味深い見解である。特に最初の3例は、Gutenbrunner 自身が述べるように、⁴⁵⁾みな新しい段落の初めの部分をなしており、朗じた場合にこのスタイルを知っている聞き手に対してなんらかの効果をもったであろうことは十分想像できる。しかし „Helmbrecht“ は全体で1934行におよぶ作品である。僅か7例の四行句をもって全体の性格づけをしようとするには——もちろん Gutenbrunner 自身もこれを決定的要因としているのではないが——いささか無理があるのではないだろうか。またこれらの例がすべて会話でなく地の文の箇所であることも指摘されているが、⁴⁶⁾そのことがどんな意味をもつかはなんら記されていないのである。この Gutenbrunner 説はたしかに興味深いのだが、今後の更なる展開をまつべき段階にあるといえよう。

さて Kurt Ruh はその Panzer から受け継いだ校訂版の中で、断定は差し控えながらもやはり (Wernher は!) Fahrender だった可能性が大きいと述べた。⁴⁷⁾この人物はいわゆる Wahrheitsbetuierung (語られた内容は真実であると聞き手・読み手に誓うこと) 等の、受容者に向けたメッセージを作品の随所に配しているが、これがいわゆる Spielmann (ふつう「吟遊詩人」と訳される) のもっていたスタイルと共通であるということから、Ruh はこ

44) Gutenbrunner は ‚1919-23‘ と記しているが、これは誤植であろう。(Gutenbrunner a. a. O., S. 66).

45) ibd., S. 66.

46) ibd., S. 66.

47) Ruh a. a. O., S. XIXf.

れを、Wernher を遍歴芸人だったろうとする自らの見解の第一の根拠としたのである。⁴⁸⁾さらに続けて(前述の)Gutenbrunner の考察を紹介したあと、作者には「学識がほとんど認められない」と述べている。この、先の Panzer の見方と一致する点を彼の第三の論拠とすれば、第四は——これも Panzer と重なるが——作者が冒頭で自らを職業詩人として紹介している点である。さらに Ruh は Wernher の添え名の ‚Gartenaere‘ を、宮廷から宮廷へと渡り歩く詩人のそれとみなすのが一番よいとし、これを第五の論拠とした。そしてこれらの論点の具体的な例として、Ruh は有名な839行以下と848行以下(ともに作者が自分の身の上と主人公の受けた立派なもてなしを比べて羨むくんだり)を挙げている。

ところでこの ‚Fahrender‘ という名称は、文字通りの意味が示すように本来は生活形態あるいは様式(少なくともその一部)を表わすものであり、それだけで「身分」を表現しきることはできない。(だから Fahrender を「遍歴芸人」と訳すのは本来は正しくない。精々「放浪人」とするのが限界であろうが、それでは却って不可解になるおそれがあるので、ここでは一部の慣用に従って「遍歴芸人」としておく。)この語自体は、さらにあいまいな先の ‚Spielmann‘ という表現のもたらす混乱を避けるためにしばしば用いられるようになってきたものである。この ‚spilman‘, ‚spilliute‘ という表現は、„Helmbrecht“にも登場する(おそらく)身分の低い芸人(本文943行及び1609行)から、はてはきわめて身分の高い人物でも楽器の名手である場合にこれをさすこともできる。(たとえば „Das Nibelungenlied“ の Volkêr⁴⁹⁾など。)そのため「身分」の問題を(一応)捨象した ‚Fahrender‘ という表現が用いられるようになってきたのだが、この問題の難しさは依然として残っているといわざるをえない。⁵⁰⁾というのもこの範疇におさまる階層はきわめて

48) この点には既に Panzer もふれている。(Panzer a. a. O., S. XIV) ただし Brackert らはこれらの技法が他の身分の詩人たちにも用いられているとし、Ruh の見解を疑問視している。しかし彼らも Fahrender-These の信憑性が最も大きいということは認めている。(Brackert et al. a. a. O., S. 131).

49) たとえば Str. 1966-3b (Bartsch—de Boor—Wisniewski の版)

50) Wehrli a. a. O., S. 79f.

広く、Bumke によれば生まれついでにの遍歴芸人の他に、たとえばかつては教会でなんらかの学問を修めたような者まで含まれていたからである。⁵¹⁾ (ただこれらの人物は、仮に Fahrender となる前にどんな身分だったとしても、この「転落」によってみな身分の上では、'friedlos' とみなされた可能性がある⁵²⁾。ちなみに Ruh は Fahrender となる以前の作者の出身階級についても言及しているが、これによると Panzer が示唆したような「農民」かあるいは「市民」かはわからないものの、「騎士」ではありえなかったろうと推測している⁵³⁾。しかしこの Fahrender に関する分野は記録文書がきわめて乏しく、実際研究もまだそれほど進んではないようである。このテーゼの当否を論じるためには少なくとも Fahrender に関する既出の研究をおさえることが不可欠であろう。

さて „Helmbrecht“ の作者を Fahrender とみなす上記の見解にも反対する意見はある。たとえば Tippelskirch は、Ruh が作者を学識のほとんどない者とみなし、'spielmännisch' という表現まで用いたことに反発して、

Sold ich allez sîn geverte sagen,/ daz enwurde in driên
tagen/ oder lihte in einer wochen/ nimmer gar volsprochen.

(v. 649-652)

(その旅のことを残らず話すという段になりますと、三日やそこいらでは、いや、一週間くらいかかっても、決してお話ししきれますまい。)

ze wunsche im daz êrste jâr/ sîne segelwinde duzzen/ und
siniu schef ze heile fluzzen. (v. 684-686)

(最初の年は彼の望み通りに風が吹き、彼はその航路を順調にすすん

51) Bumke a. a. O., S. 691ff.

52) ibd., S. 695f.

53) Ruh a. a. O., S. XX.

だようなものでした。)

といった表現や、697行以下の主人公の最初の帰郷の場面全体から、この作者には教養がありかつ博学でもあり、Ruh とは正反対の意見を述べている⁵⁴⁾。

この作者にはたして教養・学識があったかどうかという点は、本稿の眼目に大きくかかわる問題であるだけにきわめて重要なのであるが、残されたテキストから実際にそのどちらかであると判断するのは、これまたきわめて困難であるといわなければならない。このことを Tippelskirch の挙げた例について考えてみる。まず初めの649行以下だが、これは単に、主人公が短時間には語り尽くせぬほど多くの体験をしたという言明にすぎず、ここを教養に結びつけようとする Tippelskirch の意図は理解できない。さらに第二の引用例だが、ここは全体の流れの中で読むとわかるのだが、たしかに「うまい」比喻ではある。だからある程度学問を修めた人間がその片鱗をうかがわせた箇所であるとする解釈は一応成り立つ。しかし見方を変えれば、ここは身分が低く教養もない遍歴詩人が、いわば「背伸び」をして気取った表現を用いたにすぎないととらえることも可能であろう。現に語りの他の部分が淡々と述べられ、こうしたいわゆる「格好の良い」表現が少ないだけに、唐突だという印象もたしかに免れないところである。そして最後の帰郷のくだりであるが、Tippelskirch がなんら具体的理由を挙げていないのでここは想像に頼るしかないのだが、彼女が仮に、この場面に頻出する様々な外国語による挨拶表現を「教養と学識」に結びつけたのだとしたら、その妥当性にも問題があるというべきだろう。なぜなら、作者が当該の言語で単に挨拶ができる程度の知識しかもっていないのだとしたら、とても「教養」とはいえないからである。これは外国語の数がいくら増えても結局は同じことである。問題のシーンではフラマン語 (v. 717, 747, 764ff. Vgl. v. 1696f., 1717), ラテン語 (v. 722), フランス語 (v. 726, 755. Vgl. v. 1713), ボヘミア語 (v. 728) が出るが、どれもごく基本

54) Tippelskirch 1973, S. 66.

的な表現ばかりである⁵⁵⁾。むしろこうした表現が、主人公が最初の旅を終えてちょうど帰宅した場面に出たものであることに注目したい。作者も同様の *Wanderleben* を送っていたからこそ、自らの体験で習得した様々な言語の挨拶を、ここでちりばめたかもしれないのである。その意味で、これらは作者を *Fahrender* とみなす説に却って有利な箇所だともいいえよう⁵⁶⁾。

最後に *Fahrender* 説の傍証たりうるものの例として次の文を引用する。

ûf den strâzen und ûf den wegen/ was diu wagenvart gelegen:/
die varent alle nû mit fride,/ sît Helmbrecht ist an der
wide. (v. 1919-1922)

(あの道も、この路も、車の往来が跡絶えておりましたが、ヘルムブレヒトがしばり首になってからというもの、みなまた平穏無事に走るようになりました。)

これは物語の末尾近くで悪党 Helmbrecht が、かつて自ら虐げた農民たちのリンチにあって殺され、付近一帯に再び平穏がおとずれたことを伝えるくだりである。城塞や都市の警備の及ばない街道上を旅することは、中世当時においては、まして *friedlos* の身の上なら、きわめて危険なことだった。しかし遍歴芸人であるなら *Wanderleben* は避けて通れない宿命である。ここに旅の安全を脅かす者を敵視する姿勢が出るのは当然であろう。

この物語の作者が——具体的な身分はともかく少なくとも生活形態の上では——*Fahrender* だったとする説は、これまで見てきたように少なからぬ根拠と

55) ちなみにボヘミア語の挨拶については、Ruh がこれをもって作品の成立年代をボヘミアによるオーストリア支配 (1246年) 以降だろうとしているが (Ruh a. a. O., S. XVI), ここは Brackert らのいうように、国境近くだから理解されるのだと考えてよからう (Brackert et al. a. a. O., S. 132)。なおラテン語の挨拶表現については次稿で扱う予定である。

56) なお作者の *Lesefähigkeit* (識字力、つまり文盲でないということ) を示しうる例として本文74行目 (*ez ist wâr daz ich iu lise*) があり、きわめて重要であるが、これについても次稿で論じる。

説得力をもち、事実今日最も多くの支持者を集めてもいるのである⁵⁷⁾。

1.6. Charles Edward Gough の「(農民出身の) Fanziskaner」説

イギリスの研究者 Gough は 1953年に、„Helmbrecht“ の作者（彼も Wernher と断じている）を「農民出身のフランシスコ修道会士」とみなす見解を出した⁵⁸⁾。出身を農民とみなす彼の根拠は本文864行目の「もし私が高貴のお方であったとしても」という表現であるが、その場合後に詩作にたずさわる可能性として次の二つがあるという。その第一はいわゆる吟遊詩人 (spilman) になることで、第二は聖職につくことである。ここで Gough は、——先の Keinz 説と同様——作者がまず第一に想定した聴衆は農民だったと考えていることから、第一の可能性はないとみなしている。いわゆる吟遊詩人の場合ならその作品が宮廷で朗ぜられることになるため、その保護者たちを賛美する字句が本文中にみられる筈なのに、それがここではみられないからであるという⁵⁹⁾。それどころか彼によれば、この作品では過ぎ去った栄光時代の文芸を支えた騎士たちがたたえられている（たとえば920—967行）のに対し、同時代の騎士階級はただ低く見られているという。その根拠として Gough は次の例を挙げる。

und nāeme ein rehter hoveman/ dem gebûren swaz er ie
gewan,/ der gedinget doch ze jungest baz/ danne dû. (v. 345-
348)

(ほんもののさむらいが百姓の持物をめしあげるときには、結局は裁きの場に出ておまえなんぞよりうまくやりおおせるものだ。)

57) 最近では Gutenbrunner, Ruh, Brackert et al. の他, Hochholzer (1973, S. 29), Schindele (1975, S. 174), Tschirch (1978, S. 3) 等がいる。

58) Gough 1953, S. 110および112。

59) ただし Bumke は, Fahrender が宮廷だけでなく路傍でも芸を行ったことを示唆している。(本稿 Keinz の項および註18)を参照されたい。)

wær des geburt ein wênic laz,/ der behagte doch der welde
 baz/ dan von künege fruht ein man/ der tugent noch êre nie
 gewan./ ein frumer man von swacher art/ und ein edel man,
 an dem nie wart/ weder zuht noch êre bekant,/ und koment
 die bêde in ein lant/ dâ niemen weiz wer si sint,/ man hât
 des swachen mannes kint/ für den edelen hōchgeborn/ der für
 êre hât schande erkorn./ sun, und wilt dû edel sîn,/ daz rât
 ich ûf die triuwe mîn,/ sô tuo vil edelliche: (v. 491-505)

(生まれは少々いやしくても、その方が、王族の出ではあっても何の
 美德も栄誉もないような者より、ずっと世の中で気に入られるのだ。
 その出はいやしくても、ものの役に立つ男と、身分は高いが嗜みも栄
 誉もそなわっていないような者と、その二人が、誰も見知らぬ国へやっ
 て来たとしたら、そのいやしい生まれの者の方が、身分は高いがろく
 な事はしなかった者よりも重んじられるのだ。いいか、わしは真実いっ
 て聞かせるが、立派な人になりたいと思うなら、ほんとうに立派な行
 いをすることだ。)

その他：653—696行（盗賊騎士に主人公が仕えたところ）、964—980行（父
 親の口を借りた宮廷の現状批判）、985—1035行（息子・父親の口を借りた宮廷
 の現状描写とそれへの嘆き）、1106—1114行（「貧しい館づとめより百姓をや
 る方がずっとよい」）、1317—1382行（自分の母親とさむらいが密通していたと
 いう主人公の言）、1386—1392行（妹 Gotelint の同様の言）。

Gough はこれらの例により、作者が、上流階級と農夫たちの両方のすべての
 の悪習を譴責する義務を感じていた Franziskaner だったとする結論に達し
 ているのである⁶⁰⁾。

ところで Gough は、この農民起源の部分は別にして、(Südtirol の
 Garda ないし Garda 湖沿岸地方出身の) フランシスコ修道会士とみなす
 部分については既にその校訂版でかなり詳しく論じている⁶¹⁾。彼はそこでまず

60) Franziskaner の Berthold von Regensburg がきびしい Hofkritik を行っ
 ている例は、この点の傍証となろう。(Vgl. Bumke a. a. O., S. 588).

61) Gough 1947, S. XVII-XXV.

C. Schröder, Keinz, Schiffmann 説を否定的に紹介した後、Panzer がその Fahrender 説の根拠として本文848行以下（作者が主人公のうけたもてなしを羨むくんだり）、913行以下（父親の宮廷賛美）等を挙げたことに反対し、さらに780行以下（「お坊さまにも必要以上のものはさしあげられない……」）によって聖職者説を否定しようとする考え方も疑問に付している⁶²⁾。そして有名な例である以下の文を挙げる。

dîn geniuzet wolf und ar/ und alliu creatûre gar/ und swaz
got ûf der erden/ hiez iz lebendic werden. (v. 549-552)

（狼や鷲や、生物みんな、神様がこの世にお生まれさせなすったものみな^の為になるのだ。）

Gough によればこれらの箇所こそ、逆に作者が Franziskaner だったことの何よりの証拠なのである。第一に先の848行以下は、彼が当時まだ新しく、かつ急速に成長しつつあった教団に属することで各地を（おそらく農民らの教化のために）巡り歩き、その際人々の無礼なもてなしを進んで受け入れたことを明かすという。（Gough はこの作品が、作者の放浪生活時に集められた民話や迷信を多く含んでいるとも考えている。）第二に、この848行以下や660行以下（主人公の悪辣さのくんだり）、さらに208行以下（主人公と比べたら自分はてんで女にもてない、との作者の言）といった表現は、ユーモア等の様々な技法を用いたもので、説教の際の効果をねらったものであるとする。またこれらの点とは別に、作者が主人公の父親にいわせているセリフには彼の人生観が反映されており、実際そこにもいくつかのフランシスコ派風の特徴がみられると Gough は述べている。（例：495—502行、506—507行、549—552行、891—898行）。

彼は他にもいくつかの点を挙げているが、——特に Panzer らの見解と比

62) ただしここでの Gough は、1930年までの Panzer 版によっている。

べて——きわめて重要なのは、作者を well-read とみなしている点であろう。Mhd. 最盛期の宮廷生活に関する描写はおそらく作者の読書体験に基づくものであって、実際の経験ではないと Gough は考えている。そのため780行以下——これは既にみてきたように聖職者説に反対する研究者たちがその根拠としてしばしば引用している——も、たしかに聖職者のペン(!)には不自然だが農民の口から出るのはおかしくないという解釈を与えているのである。さらに Gough は、1925行に出る ‚ein wiser‘ という表現は作者が自らをさし示したものととらえている⁶³⁾。そして最後に、作者の死後農民階級も墮落・没落(?)するようになって初めてこの作品も宮廷社会に受け入れられるようになったとしめくくっている⁶⁴⁾。

さて以上が Gough のテーゼのごくおおまかな梗概であるが、これも今日なお有力なもののひとつに数えられているとあってよい。たとえば Ruh はその Ausgabe でこの仮説を一度は否定しようとしながら、Tippelskirch の批判を受け入れてこうした可能性を認めているのである⁶⁵⁾。ただこまかく見ると、先行諸説と同様ここでもやはりいくつかの問題点が浮かび上がってくる。その最大のものは、Gough の逐一挙げる ‚franziskanisch‘ な例がなぜ franziskanisch とみなされなければならないかの説明がまったく欠除していることであろう。彼の説明はほとんど自らの推理ないしは断定を述べるだけでのための論拠が乏しいうえ、フランシスコ派の根本思想やその文芸の傾向とのかかわりについて具体的なことがなんら語られていないのである。たとえば Gough は、「フランシスコ派の人々は詩を愛した」という文を書いているが⁶⁶⁾、それならば彼らの好んだ詩と „Helmbrecht“ との対比がなされてしかるべきではないか⁶⁷⁾。さらに彼の論旨には不自然な点もいくつかある。たとえ

63) 作者の「教養」の問題は次稿で扱う予定である。なお註54) および55) を参照されたい。

64) Gough 1953, S. 112.

65) Ruh a. a. O., S. XVIII および Tippelskirch a. a. O., S. 66f. ただし Tippelskirch 自身は一般的な「聖職者」説にとどまり、Gough のようにことさら Franziskaner と結びつけようとはしていない。

66) Gough 1947, S. XXII.

ば有名な780行以下について彼は、既に紹介したように、ふつうの農民の口にはさしておかしくないと言っているが、この農夫に語らせている主体は作者なのである。悪玉の主人公、善玉の父親、そして他の登場人物もすべて作者によって性格づけがなされているにも拘らず、自己の見解に相入れないからといってある一部だけを作者の人格から切り離す事にはやはり無理があるといえよう。どんな作者にも必ずなんらかの *Perspektive* がある。仮にここで、農民を聴衆とみなす見解に反対して *anachronistisch* という表現を用いた *Ruh* に与するなら⁶⁸⁾、主人公の父親の態度はやはり宮廷社会から見た理想像を色濃く体現し、息子はその反対像であるといえよう。つまり作者の視点は、受容者である宮廷社会の構成員の世界観（ないしはその支配原理）に大きく影響されているのである。この点と本文109行以下（飛び出した尼僧のくだり）および208行以下（女にはもてまい、との作者の言）等を考え合わせると、この作者・作品・聴衆をとりまく世界ではやはり「聖職者臭」よりむしろ「俗臭」の方が強いというべきではないだろうか。

また出自を「農民」とみなす根拠も864行目だけでは薄弱である。しかもその表現は曖昧で、*Gough* のような解釈も可能だが、作者の身分としてはいわゆる超高位者が排除されるだけかもしれないのである⁶⁹⁾。

ところで *Gough* は農民を聴衆とみなす理由として「同時代の宮廷への批判」を挙げたが、その例のうちいくつかは既に扱った（宮廷文学の一要素である）, *Hofkritik* に該当するものである。また先に , *franziskanisch* として挙げられた495行以下や506行以下もむしろ *hofkritisch* とみなすべきである。したがって聴衆としての宮廷人を排する必要はほぼなくなったといえよう⁷⁰⁾。だとすると「聴衆＝農民」という考え方に基づいて展開した *Gough*

67) また Brackert らは、549行以下を、, *franziskanisch* とみなすことを誤りとしている。(Brackert et al. a. a. O. S. 131).

68) 註16) を参照されたい。

69) なお本章第6項 (Panzer の3番目の論拠) を参照されたい。

70) なお農民を *Publikum* とする考え方については本章第1項 (Keinz 説) を参照されたい。

の見解は、いまやその足許が揺らぎ始めていることになる^{71) 71a)}。

1.7. Bruno Friedrich Steinbruckner らの騎士身分説

Helmut de Boor はその文学史の記述⁷²⁾の中で、まず „Helmbrecht“ の作者をあっさり Wernher der Gartenaere とみなした。そして確かなことはいえないと断わりながらも、身分は放浪文芸人 (wandernder Literat) だったろうとし⁷³⁾、騎士たちの考え方や彼らの実体に通じていることが読みとれると述べる。そしてその証拠として848行以下(どこへ行っても主人公ほどの厚遇は受けられまい)と作者が述べるところ)を挙げ、作品全体の構成自体は(放浪者でなく)定住者の視点から描かれてはいるものの⁷⁴⁾、これはやはり騎士の放浪生活に基づくとの見解を出しているのである。そのうえで、この作品をよく知っていたらと彼が推定する Seifried Helblinc と同様の境遇にあった、つまり ritterliche Herkunft の人物であると考えたのである⁷⁵⁾。

これを受ける形で Steinbruckner が1968年に一歩進めた騎士身分説を打ち出した⁷⁶⁾。彼はまず „Helmbrecht“ の作者に関する Keinz, Schröder,

71) なお Franziskaner として知られる David von Augsburg や Berthold von Regensburg の書いたものに、奇妙なことに教団設立者 Franciscus von Assisi の名がほとんど出ないということについて、Ruh は、彼らが活躍した当時(13世紀半ば以降)教団内に路線上の対立があり、その煽りで Franciscus の名を出せなかったのではないかと推測している。(Ruh 1964 S. 270f. およびRuh 1980, Sp. 56) しかしこれをもって、„Helmbrecht“ に Franciscus の名が出ていなくてもその作者はやはり Franziskaner だったと主張することは牽強附会であろう。

71a) ちなみに E. Lachmann はGough の主張にさらに一歩踏みこみ、作者を含む、ドイツ語圏から最初にこのフランシスコ派に入った Südtiroler の間では例外なく(?)出身地名を自分の名前にとり入れていた(Garda → der Gartenaere)と述べている。(E. Lachmann 1951, S. 151).

72) de Boor 1964, S. 262-266.

73) Panzer らの項で述べたように、厳密にいうとこうした表現では「身分」にはならない。

74) de Boor はその根拠を特に挙げてはいないが、おそらく作品内の固有地名が互いに比較的近い位置にあるからであろう。

75) de Boor a. a. O., S. 398.

76) Steinbruckner a. a. O., S. 378-380.

Stechele, Schiffmann および Gough らの先行諸説をいずれも根拠薄弱として否定したうえで、テキスト内の諸々の表現や当時の社会状況をふまえて考察する。それをもとに重要な点を抜き出すと以下のようなになる。

1. Neidhart von Reuental をたたえ (217—220行) 自らを *tihtære* と呼ぶ (1933行)⁷⁷⁾ ところは、(聖職者より) むしろ俗人 (即ち平信徒: *Laie*) を思わせる。
2. „der Gartenaere“ という Beiname が何を (つまり職業・身分・姓あるいはその他のものを) さすのかはまったく不明である。
3. 作者を *Fahrender* とみなす必要はない。(この点で Steinbruckner は de Boor と見解が異なる。) そのような作者なら博識ぶりをひけらかすところだが、そうした箇所がテキスト内になんら見られないから。
4. 制作年代については、Neidhart の死 (1240年頃) 以降、さらに728行目に現われるボヘミア語の挨拶 „*dobra ytra*“ (= 「おはよう」) がオーストリア等では1246年以降に用いられたろうから、結局13世紀のちょうど半ば頃である⁷⁸⁾。そしてこの頃なら作者 (Wernher) は、同時代の作品に通じている点と語りの巧みさの点で既に熟年に達していたであろう。
5. もし *Fahrender* だったなら、(その手腕からして) 彼自身とその作品の名声はもっと広まっていただろう。(しかし現実には他の人物の作品に引用されておらず、写本も二つしか残っていない。)
6. 従って作者は *Wanderleben* を送らず、特定箇所に居住していたとみるべき。
7. また *Fahrender* とみなすにすれば、言葉遣いがむしろ冷静で、簡潔にして要を得ている。さらにその種の人間なら避けていたであろう (?) 方言的色彩に貫かれているのはおかしい。
8. そのため „Helmbrecht“ の作者は、de Boor の推定するように定住していた *Ritter* とみなすのが正しいと思われる。

77) Steinbruckner (a. a. O., S. 378) の「1930行目」という表示は誤りである。

78) この点については註55) も参照されたい。

9. ただし本文848行目により、作者は若い頃には *Wanderleben* を送っていたかもしれない。

以上が de Boor および Steinbruckner による騎士身分説の要旨であり、注目すべき点もいくつかある。たとえば主人公は旅の生活を長く送っているが、その際の生活に関する描写はごく僅かであり（たとえば653—696行）、もっぱら故郷の農村での対話とそれを補う語りが中心になっている。この点で、作者の視点が定住者のものであるという指摘はすんなりと受け入れられることができる。

しかし彼らの挙げた個々の論拠にはむしろ疑問の余地が少なくない。たとえば de Boor がいうところの、作者は騎士たちの考え方や彼らの実体に通じているから騎士身分だった可能性があるという点には、あまり説得力がない。最近の研究成果が示すように中世の芸術がおしなべて有力者の委託を受けることで初めて成立・展開したのであれば⁷⁹⁾、出来上がった作品の中にその後援者の関心が反映されるのは当然であろう。（それどころか場合によってはその人物を中心とする *Publikum* に快く迎え入れられるための、あるいは彼らを十二分に楽しませるための作者の努力の跡が如実にうかがわれることもある。）だとすればこのような、宮廷社会の様相を少なからず描き出している作品を著わした者が騎士たちの考え方やその生活状況に通じているのは当然のことである。従って騎士身分の宮廷人が依頼者であれば、実際の制作者はどんな身分であっても、作られた作品に騎士道精神を肯定的にとらえる姿勢が出るといって差し支えあるまい。特に作者の経済的な力が弱く、宮廷に寄食していたような場合ならばなおのことである。またどんな身分であっても、また長期であろうと短期であろうと、宮廷社会に一度足を踏み入れればある程度の様子がわかるにちがいないのだから——913—981行および1104—1114行で作者は主人公の父親に、宮廷社会の一端を垣間見た体験や貧しい宮廷人の生活の辛さなどを語らせている——、この論点は作者の身分を推し量る要因にはなり得ないだろう。逆に騎士たちの考え方をよく体現したものが必ずその集団の一員の手になるとい

79) 註17) を参照されたい。

うなら、宮廷文学はみな武士の手になったとしなければなるまい。しかし現実がそうでないことは周知の通りである⁸⁰⁾。

ところでこの作者が *Wanderleben* を送ったかどうかという問題——*de Boor* と *Steinbrückner* はやや意見を異にしている——だが、この点に関する *Steinbrückner* の否定的説明には実証的でないところがある。*Fahrender* なら博識ぶりをひけらかすだろう、とか彼自身とその作品の名声はもっと広まっていたろうが他の作品に引かれていないという記述は、おそらく *Steinbrückner* 自身が読んだ *Fahrender* の手になる作品の解釈に基づくのだろうが、いずれにしてもここにはなんら具体的根拠が挙げられていないのである⁸¹⁾。またこの「名声」に関する見解は、現代までかろうじて残っている史的資料の中だけに中世文学の世界を見ようとするもので首肯できない。中世から今日に至るまでの間にいかに多くの写本やその他の資料が失われたことか。残されたものの中に „Helmrecht“ やその作者についての記述がないからといって、また写本も二つしかないからといっても、それが当時の人気をはかるバロメーターになるとはいえまい。しかも現代におけるこの作品の人気の高さから類推しても作者が(各地をまわる芸人でなく)定住者だったろうと彼は考えているが⁸²⁾、今日の評価基準をそのまま当時にあてはめることには疑問がある。さらに彼は

80) だから前々項で挙げた *Panzer* の *Fahrender* 説の第5の論点も決定要因にならないといえる。ちなみに *Brackert* にも、宮廷に関する素養も宮廷文学に関する多くの知識も、作者を *Ritter* とみなす確かな理由にはならないと述べている。(Brackert et al., S. 130).

81) ただ „*Ambraser Heldenbuch*“ のうちの „Helmrecht“ など末尾の7作品はその前の15品の宮廷・英雄ものを収集する過程でみつかった オーストリア地方の小品とみなされている。(Janota 1978, Sp. 324f.) 従って „Helmrecht“ のローカル性が相対的に強い、とはいえる。そのため仮に作者が *Wanderleben* を送っていたとしてもあまり広くない範囲でのことだったかもしれないので、この点が *Steinbrückner* の推測の傍証になる可能性はある。

82) *Steinbrückner* a. a. O., S. 379. 彼は作者がもし *Fahrender* だったら、メディアの発達した現代ほどではないにしても、その名声が相当広まっていたろうと考えているが、当時と現代の受容者がこの作品の「内容」までも同じように享受しうるかどうかにについてはふれていない。

テキストの言語や表現法の特徴についても Fahrender らしくないと述べているが、——Fahrender 説の当否は別として——ここでも「印象」による判断の域を出ておらず、論拠としては力不足である。彼はまた現存テキストの言語を直接作者と結びつけているが（それはある程度止むを得ないことでもあるが）、Ruh や Brackert らの指摘する通り、当時の写本筆者（Abschreiber）たちは自分の原拠（Vorlage）をそれほど厳格に尊重していた訳ではないようである⁸³⁾。Hans Ried の原拠に対する忠実度がしばしば指摘され評価もされるが⁸⁴⁾、これとて彼が依拠したものが、„Helmbrecht“ のいわゆるオリジナルと一体どんな関係にあるかがわかっていないのである⁸⁵⁾。従って言語、特に方言についてはせいぜい写本そのものについてしか語れないだろう。なお Steinbruckner は、作者が若い頃の Wanderleben の可能性を示唆しているが、それならば当該箇所の変動詞は現在形よりむしろ過去形であるべきだろう。

ここまで論じてきた限りでは、Steinbruckner の定住騎士説を完全に否定し去ることはむろんできないものの、彼の論ずる点には反論の余地が少なからずあるといえる。仮にこれを支持するとしても、有効な決定打がないため、いわばまだ宙に浮いた状態とみなさざるを得ないのである。

（つづく）

83) Ruh 1974, S. XII および Brackert et al. a. a. O., S. 122.

84) 本稿 0 章を参照されたい。

85) Brackert et al. a. a. O., S. 123.

参 考 文 献

雑誌・シリーズ名の略号については慣用に従う

„Helmbrecht“ の校訂版と翻訳

- Brackert, Helmut et al. 1972: Wernher der Gartenaere, Helmbrecht. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Herausgegeben, übersetzt und mit einem Anhang versehen von H. B., Winfried Frey, Dieter Seitz. Frankfurt/Main. (Fischer Taschenbuch 6024).
- Gough, Charles E (dward) 1947: Meier Helmbrecht. A poem by Wernher der Gartenaere. 2. Auflage. Oxford. (Backwell's German Texts).
- 浜崎長寿 1970: 『ヘルムブレヒト物語』東京.
- Keinz, Friedrich 1865: Meier Helmbrecht und seine Heimat. München.
 —————1877: Helmbrecht und seine Heimat. 2., umgearbeitete Auflage. Leipzig.
- Lemmer, Manfred 1977: Deutschsprachige Erzähler des Mittelalters. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen und herausgegeben von M. L. Leipzig. Reprint in Bremen 1983. (S. 219-255, 570-575).
- Panzer, Friedrich 1941: Meier Helmbrecht von Wernher dem Gartenaere. 5. Auflage. Halle. (ATB 11).
- Piper, Paul (1889): Höfische Epik. Teil 2. (Deutsche National-Litteratur Bd. 4 Abt. 1, 2). Stuttgart. Reprint in Tokyo 1973. (S. 398-452).
- Pretzel, Ulrich 1971: Deutsche Erzählungen des Mittelalters ins Neuhochdeutsche übertragen von U. P. München. (S. 55-83, 246-249).
- Ruh, Kurt 1974: Wernher der Gartenaere, Helmbrecht. 9., neubearbeitete Auflage. Tübingen. (ATB 11).
- Speckenbach, Klaus 1974: Wernher der Gartenaere, Helmbrecht. Text, Nacherzählung, Begriffserklärungen. Darmstadt.
- Tschirch, Fritz 1978: Wernher der Gärtner. Helmbrecht. Mittelhochdeutsch und Neuhochdeutsch. Herausgegeben, übersetzt und erläutert von F. T. Durchgesehene und verbesserte Auflage. Stuttgart. (RUB 9498).

その他の作品

- Dietrichs Flucht 1866: Deutsches Heldenbuch. 2. Teil. Herausgegeben von Ernst Martin. 2. unveränderte Auflage. Dublin/Zurich. 1967.
- Hartmann von Aue 1968: Iwein. Eine Erzählung von H. v. A. Herausgegeben von G(eorg) F(riedrich) Benecke und K(arl) Lachmann. Neubearbeitet von Ludwig Wolff. 7. Ausgabe. Bd. 1. Berlin.

- Neidhart von Reuental 1984: Die Lieder Neidharts. Herausgegeben von Edmund Wießner. Fortgeführt von Hanns Fischer. 4. Auflage revidiert von Paul Sappler. Mit einem Melodieanhang von Helmut Lomnitzer. Tübingen. (ATB 44).
- Das Nibelungenlied 1979: Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, herausgegeben von Helmut de Boor. 21. revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Auflage. Wiesbaden.
- Walther von der Vogelweide 1984: Sämtliche Lieder. Mittelhochdeutsch und in neuhochdeutscher Prosa. Mit einer Einführung in die Liedkunst Walthers herausgegeben und übertragen von Friedrich Maurer. 4. unveränderte Auflage. München. (UTB 167).

研究文献

- Banta, Frank G. 1978: Berthold von Regensburg. in: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage Bd. 1. Berlin/New York. Sp. 817-823.
- Blosen, Hans 1974: Textschichten im „Helmbrecht“. in: PBB 96. S. 280-302.
- de Boor, Helmut 1964: Die deutsche Literatur im späten Mittelalter. Zerfall und Neubeginn. 1. Teil: 1250-1350. (Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zur Gegenwart von H. de B. und Richard Newald. Bd. 3/1). 2. Auflage. München.
- Bumke, Joachim 1976: Ministerialität und Ritterdichtung. Umriss der Forschung. München.
- 1986; Höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter. München. (dtv 4442).
- Dettloff, Werner 1983: Franziskanerschule. in: Theologische Realenzyklopädie. Bd. 11. Berlin/New York. S. 397-401.
- Goez, Werner 1983: Franciscus von Assisi. in: Theologische Realenzyklopädie. Bd. 11. Berlin/New York. S. 299-307.
- Gough, Charles E(dward) 1953: The Homeland of Wernher der Gartenaere. in: Proceedings of the Leeds Philosophical and Literary Society 7. S. 107-112.
- Gutenbrunner, Siegfried 1954/55: Zum Meier Helmbrecht. in: ZfdA 85. S. 64-66.
- Hochholzer, Adolf 1973: Meier Helmbrecht - das Versepos aus dem bairisch-

- österreichischen Raum. in: Heimat am Inn. Kultur und Geschichte. Natur und Landschaft am Inn. Niederbayern-Oberösterreich. Bd. 2. Simbach. S. 21-37.
- Janota, Johannes 1978: ‚Ambraser Heldenbuch‘. in: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage Bd. 1. Berlin/New York. Sp. 323-327.
- Lachmann, Eduard 1951: Der Verfasser des Meier Helmbrecht ein Südtiroler? in: Der Schlern. Illustrierte Monatsschrift für Heimat- und Volkskunde 25. S. 146-151.
- Lachmann, Karl 1876: Über Singen und Sagen. in: Kleinere Schriften zur deutschen Philologie. Bd. 1. Berlin. Reprint in Berlin 1969.
- Meyer, Richard M(owitz) 1908: Helmbrecht und seine Haube. in: ZfdPh 40. S. 421-430.
- Panzer, Friedrich 1902: Zum Meier Helmbrecht. in: PBB 27. S. 88-102.
- Ruh, Kurt 1964: Zur Grundlegung einer Geschichte der franziskanischen Mystik. in: Altdeutsche und altniederländische Mystik. Herausgegeben von K. R. Darmstadt. (WdF 23). S. 240-274.
- 1980: David von Augsburg. in: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Bd. 2. Berlin/New York. Sp. 47-58.
- Schiffmann, Konrad 1917: Studien zum Helmbrecht. in: PBB 42. S. 1-17.
- 1940: Die Heimat des Helmbrecht. in: PBB 64. S. 43-46.
- Schindele, Gerhard 1975: ‚Helmbrecht‘. Bäuerlicher Aufstieg und landesherrliche Gewalt. in: Literatur im Feudalismus. Herausgegeben von Dieter Richter. Stuttgart. (Literaturwissenschaft und Sozialwissenschaften 5). S. 131-211.
- Schlageter, Johannes 1983: Franziskaner. in: Theologische Realenzyklopädie. Bd. 11. Berlin/New York. S. 389-397.
- Schröder, Carl 1865: Heimat und Dichter des Helmbrecht. in: Germania. Vierteljahrsschrift für Deutsche Altertumskunde 10. S. 455-464.
- Schröder, Richard 1870: Corpus juris germanici poeticum. II. Wernher der gartenaere und bruder Wernher. in: ZfdPh 2. S. 302-305.
- Seelbach, Ulrich 1981: Bibliographie zu Wernher der Gartenaere. Berlin. (Bibliographie zur deutschen Literatur des Mittelalters; H. 8).
- Stechele, Karl 1922: In des Herzogs Stube auf der Burg zu Burghausen.

- in: Das Bayerland. Illustrierte Halbmonatsschrift für Bayerns Land und Volk 33. München. S. 344-349.
- Steinbruckner, Bruno Friedrich 1968: Dichter und Schauplatz des Helmbrecht. in: Euphorion 62. S. 378-384.
- von Tippelskirch, Ingrid 1973: Zum Helmbrecht. in: Euphorion 67. S. 60-70.
- Wallner, Anton 1953: Werner der Gärtner. in: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Bd. 4. Berlin. Sp. 921-926.
- Walther, Ingo F. 1985: Sämtliche Miniaturen der Manesse-Liederhandschrift. Herausgegeben von I. F. W. Aachen.
- Wehrli, Max 1984: Literatur im deutschen Mittelalter. Eine poetologische Einführung. Stuttgart. (RUB 8038).
- von Wilpert, Gero 1979: Sachwörterbuch der Literatur. 6., verbesserte und erweiterte Auflage. Stuttgart.